

NAI Newsletter No. 5・6 March 1998

# 人類学研究所 通信

第 5・6 号

Nanzan Anthropological Institute

南山大学人類学研究所

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Tel. 052-832-3111 (580)

1998年3月20日発行

## 「通信」

吉原和男

1997年4月から人類学研究所の第6期研究計画がスタートした。この研究計画は従来のように学外の研究者を交えての共同研究であり、今期のテーマは「アジア移民のエスニシティと宗教」である。アジアにおける国際的人口移動とそれに関わる現象を主な題材とするが、アジア域外への人口移動も視野に入れることになる。昨今はアジア各地からの労働者に加えて、ブラジルやペルーを出身地とする日系人も外国人労働者として迎え入れている。異文化理解の促進と文化摩擦の克服が経済／労働、教育／福祉、そして地域社会／生活の各領域で課題となってきた。欧米では決して珍しくない移民や外国人労働者という人口移動現象が、グローバル化の進展により、日本にとっても避けられない問題となった今、アジア出身の移動する人々の属する社会の社会構造と文化、そして移動を生起させるメカニズムの解明が総合的に研究される必要がある。日本にとってはまだ十分に経験された問題ではなく、未来からの挑戦とも言えるこの問題は日本国内に視野を限定するのではなく、移動するアジア人の活動する諸地域間の比較を重視して進めたい。研究分担者の専門は文化・社会人類学、社会学、宗教学、そして国際関係論と多彩であり、学際的共同研究を目指している。

(よしはら・かずお 南山大学人類学研究所第1種研究所員・南山大学助教授)

### 目次

「通信」	吉原和男	1	人類学研究所 所長日誌	8
エスニシティについて一瞥書き			研究会・講演会	13
(政治社会学からのアプローチ) 関根政美		2	Asian Folklore Studies	15

## ◆ 研究報告 ◆

## エスニシティについて一覚え書き (政治社会学からのアプローチ)

南山大学人類学研究所 第6期 第2回研究会 (1997年10月18日)

関根政美

はじめに

本稿は、南山大学人類学研究所の研究プロジェクト「アジア移民のエスニシティと宗教」の研究会における報告を土台として、同報告に対する質疑をもとに改めてまとめたものである。

## 1. エスニシティとは？

エスニシティとは、文化・言語などの特性の違いに従って分類され、実際に先祖を同一とする、あるいは先祖を同一にするとされているような非自発的集団としての性格の強い人口集団内の個々の成員のもつ主観的帰属意識あるいは運命共同意識であるとともに、各々の集団のメンバーシップと集団の境界を確定するための客観的指標であり、集団の指標や境界については自分達はもちろん、他者によっても同定されているものである。エスニシティは人種、民族などとともに重視され人間集団の境界を確定する重要な指標となっている。客観的指標には言語や宗教・服装などの顕在的な目印や記章や価値観、生活様式・行動様式などの基本的で内面的な価値性向があげられる。こうした指標をもとにメンバーが確定され境界が維持される人口集団をエスニック集団 (ethnic groups) と呼ぶ。こうした人口集団の客観的指標としてのエスニシティは不変のものではなく、また境界流動性も固定されたものではないし、血縁者や知り合いによって構成される小さい集団であったり、時には多数の見知らぬ人々の集団である想像の共同体である場合もあるが、一般的にエスニシティおよび集団の境界は固定的で変化しにくく、客観的指標としての文

化的内容は本質的、恒常的なものと考えられやすい。

なお、とくに顕在的な指標として生物学的な特徴に基づいて人口集団が分類され、そこに社会的相互作用が生じる場合、それらの集団を人種集団と呼ぶことが多い。

## 2. エスニシティと民族

以上がエスニシティとエスニック集団の暫定的定義であるが、それではエスニック集団と民族とはどう違うのか？民族 (nation)とは、国民国家に関係する概念であり、端的にいうと国民国家 (nation-state) を支える人口集団である。国民国家は基本的に1文化・1言語・1民族によって成立するものと考えられているので、エスニック集団と同じ文化集団であるといつてよい。要するに、国民国家を支えるエスニック集団を民族というのであるが、民族とはとくに国民国家をつくることのできたエスニック集団 (歴史的民族)、あるいは国民国家をもつには至っていないが、潜在的に国民国家をもちたいという意志をもつもののいまだ国家を認められない文化集団といつてよい (歴史なき民族)。民族とは国民国家をもつことのできた人々といつてよく国民とも呼ばれる。

ただし、国民国家には多文化・多民族集団によって構成され、1民族による同質文化国家でない場合のほうが多い。その場合、ネーションを国民と訳す必要がある。そして、同質文化であることを第一義的に重視せず、市民的・政治的な価値を信奉することによってネーションの成員であることを認める国民国家もある。典型的にはアメリカ合衆国やフランスがそうした点を強調している

が、これは一般にシビック・ネイション (civic nation) とカリベラル・ネイション (liberal nation) といわれる。これに対して、文化的民族国家は文化的ネイション (cultural nation) あるいはエスニック・ネイション (ethnic nation) と呼ばれることが多い。この2つの区別は絶対的なものではなく、相対的なものにすぎないが、エスニック集団はいずれにせよ国民国家の下位文化集団であることには違いはない(当該国民国家の主流人口集団をエスニック集団と呼ぶことは当初一般的ではなかったことに注意)。

故に、エスニック集団とは、国民国家のなかに取り込まれマイノリティとして位置付けられ、かつ本人達にも改めて国民国家を形成しようとする意志はなく、せいぜい自文化・言語の維持とその使用を認めさせるとともに、国民国家の主流民族に同化しないからといって差別されることを拒否するが、さりとて分離独立を要求することはなく文化・言語の平等・自由あるいは自治を要求するにすぎない人口集団といってよい。

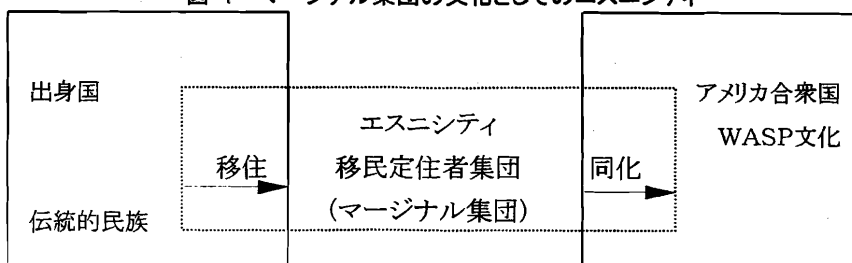
ただし、マイノリティといってもその位置付けは多様である。個々のエスニック集団のもつ結束力、数量、文化的資源等によって、社会の底辺に位置付けられるものもあれば、中間マイノリティとして社会の中流に位置付けられるものもある。さらに、社会の中に孤立した独自の社会内社会をつくるようなエスニック・エンクレイブを形成するものも生まれている。

### 3. エスニック集団の原形？

エスニシティおよびエスニック集団という概念は、もともとアメリカ合衆国において発達した概念であり、アメリカ合衆国における移民集団を意味している。基本的には、非英語系ヨーロッパ移民がアメリカに移住し、アメリカ生活や文化に同化しつつもなおある程度伝統的文化や言語・生活様式を維持しつつ、白人アングロ・サクソン・プロテスタント集団(WASP)に対してイタリア系、ギリシア系、ドイツ系のアメリカ人という異質文化意識を維持して強い絆を維持してコミュニティ活動を行い、時にはアイルランド系、ユダヤ系の人々のように政治的影響力を振るう人口集団をさしている。これらの概念が使い出されたのは、19世紀後半と考えられ、20世紀のアメリカ・シカゴ都市研究学派の発展とともに一般化されたようである。

当初、こうした移民集団を民族と呼ぼうとしたが、これらの人々は故国の人々に比べ、アメリカ社会に同化しているため完全な伝統生活を維持しているわけではなく、故国の人々と同様な意味で民族とはいえない。といってアメリカ人ではあるとしつつもやはりどこか違う人間であると考え、米国のメルティング・ポット仮説にそぐわない人々と考えられ、もともと異教徒といった意味のあったエスニックなる言葉が採用されたのである。さらに、これらの人々は、故国の人々からも何か異質な人々と見做されやすい。そのため彼らは、故国にもまたアメリカにも完全に属せないマージナルな人間集団となり(図 1)、そうした人々がもつ集合意識とその客観的指標をエスニシティと呼ぶようになったのである。故に、客観的指標としてのエ

図 1 マージナル集団の文化としてのエスニシティ



スニシティも、完全な伝統文化を維持した十全なものではなく、文化変容を被り、自分達が伝統的な祖先との間に連続性があることを自他ともに認め得る程度のものである場合が多く、象徴的なものであることも多い。場合によっては、意識のみしか存在しない場合もある。これを別な言葉でいうと「生きられている文化」そのものではなく、必要に応じて「語られる文化」であるといつてよいかもしれない。いずれにせよ、当初、エスニック集団は否定的に扱われていたといつてよい。こうした人々には当然民族自決権を行使して国民国家をつくりたいという意志はない。民族文化・言語の承認を求めるにすぎない。

なお、語られる文化とは、ここでは、他者に対して自らが属す文化集団の文化的特色を明示する場合、伝統的、日常的な文化状況のなかからとくに重要なもの正当的なものと思われるもののみを選択的に論じた典型的文化像であつて、現実の文化状況、すなわち生きられる文化をそのまま提示するものではない。本当の日本人なら・・・である、・・・でない、という形で論じられるものである。生きられる文化は純粋なものではなく雑種的なものであるが、語られる文化は不変的で純粋なものと思われやすい。

#### 4. ヨーロッパにおけるエスニシティ研究

エスニック集団は、国民国家の主流人口集団ではなくマイノリティ文化集団である。ところでこのエスニシティおよびエスニック集団概念は、ヨーロッパではあまり使用されなかった。それは、ヨーロッパは移民送出国であり受け入れ国ではなく、移民集団はおらず、国民国家内の文化的マイノリティという、移民集団ではなく周辺民族集団であり、今でこそより大きな国民国家の一部となっているが、歴史の動き如何では独立の国民国家であってもおかしくないと考えられる人口集団だからであり、スペインのバスク、カタルーニア、英国のアイルランド、スコットランド、ウェールズ、

フランスのブルターニュ、コルシカなどは、国家なき民族( stateless nations) であり、アメリカ流のエスニック集団と名付けるのには躊躇されたのである。故に、ヨーロッパではエスニシティ、エスニック集団という概念はあまり必要ないと当初考えられたのである。要するに歴史的民族と歴史なき民族の区分をすれば、民族概念のみで十分であると思われたのであろう。

しかし、1960年代、70年代になるとヨーロッパでも移民、難民問題が重視されるようになり、とくに外国人労働者の増大と定着により、アメリカ的移民問題が生じ、エスニック問題が発生し始めたため、エスニック集団、エスニシティ概念が盛んに使用されるようになった。また、少数民族の民族自決運動も盛んになり分離独立運動が盛んになるとエスニック・リバイバルが叫ばれるようになった。エスニック集団概念が同じ頃に盛んになった理由には、かつて民族集団と認定された人口集団が本気に民族文化・言語の復権あるいは分離独立を要求し始めると、民族概念は民族自決概念と結び付いているところから、国民国家の側からすると国民統合に当たり不都合となり、民族自決、分離独立を要求しないエスニック集団概念を当てはめるほうが運動を抑える上で好都合という政治的判断も働いたようだし、また、国民国家は強固な歴史の実体であり、簡単に分離独立はできないと信じられていたこともあり、民族よりエスニック集団概念が適当と学者によって考えられたからでもあろう。また、こうした少数民族も国民国家による長い同化政策のもと、伝統文化を喪失していることもあり、移民国の移民集団と同じような文化状況にあるため、エスニックなる言葉を受け入れる素地ができたのであろう(完全な伝統民族ではなく、といつて国民国家の完全な成員でもなく差別されているというマージナルな地位)。

もつとも、当該民族集団は、自分達を民族、すなわち民族自決権をもつ民族と見做しているた

め、自己定義と他者定義が相違するという事態が生じ、エスノナショナル集団なる概念も登場するにいたる。エスニック集団と規定されながらも民族自決を主張する人々の運動をエスノナショナリズムということになる。

### 5. 文化人類学とエスニック研究

また、文化人類学においても民族あるいは部族という言葉に代わってエスニック集団が70年代以降利用され始めるが、これも伝統的民族あるいは部族が独立した国民国家の下位人口集団として位置付けられて、都市化されたり同化政策のもと文化変容を経験し、伝統民族、部族とは言いにくい状態が生じて国民意識を強められながらも、伝統民族、部族意識を維持して、政治的対立を引き起こしたりするようになり、こうした文化状況が問題となり始めるとエスニシティおよびエスニック集団概念が盛んに利用されはじめたのである。

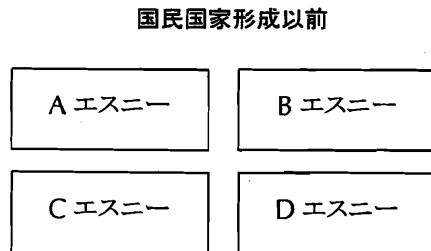
### 6. エスニシティ、民族、エスニー(エトニー)

以上からいえることは、エスニック集団とは近代国民国家形成の動きの中にマイノリティとして位置付けられた人々の不完全な民族意識、場合によってはマジョリティ民族の支配と同化政策に対する抵抗・対抗意識が中核に維持されているマイノリティ人口集団だといってよいであろう。それでは、民族は一体何から生まれてくるのだろうか。近代国民国家形成以前に民族は、あるいはそれに類するものはなかったのであろうか。今までの議論では、まず、国民国家がありその国民国家を支える人口集団が民族となり、エスニック集団やエスニシティはその後に生まれたことになる。つまり、国民国家の主体になりそこねてマジョリティではなくマイノリティに位置付けられたとか、移民・難民として当初よりマイノリティの地位に甘んじた人々の集団をエスニック集団ということになる。また、これには先住民や部族民も含まれるか

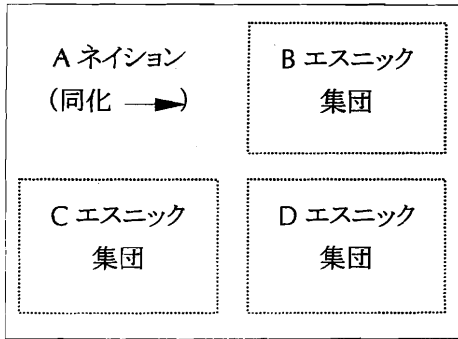
もしれない。しかし、こうした文化集団は、民族であろうがエスニック集団であろうが、国民国家システムが一般化する近代以前より存在していたはずである。つまり民族やエスニック集団の種子はどこにあるのかということになり、それが問題となる。

国民国家システム以前の文化集団は、近代化以前の伝統的集団であり、民族、エスニック集団の原形となるものである。それらをエスニック集団というとはやはり完全な伝統的文化集団ではないということをも前提とするエスニック集団の定義にそぐわなくなる。故に学者によってはエスニー(エトニー)というエスニックのフランス語の原義を利用して特別に表現しようとする人もいる。これは、エスニシティおよびエスニック集団は、国民国家の形成と国民国家システムの発展以降、孤立的に存在して独自の存在であった伝統的集団が、国民国家の発展と近代化、産業化のなかで社会的な相互作用を行い、その結果生じたものと考えられるからで、近代以前の集団に無批判的に民族やエスニック集団という名称は付けられないとみられているからである。エスニーから民族あるいはエスニック集団への動きは以下(図 2)のように表現できよう。(この場合、エスニーは部族とも構わないのではあるまいか)。

図 2 国民国家システムと  
エスニー、エスニック集団



国民国家形成以後(同化と同化への反発)



以上の議論から、エスニー(エトニー)とエスニシティの違いをまとめると以下(図3)のようになるだろう(R・コーエン「部族からエスニシティへーエスニシティ人類学における問題と焦点」青柳まちこ編・監訳、1997:153より引用)。

図3

エスニー(部族)	エスニック集団
孤立している	孤立していない
未開的	現代的
先祖返りの	
非西歐的	普遍的に適用可能
客観主義的	主観主義的あるいは双方の中間
境界の堅持	他者との関係によって規定され、境界変動的
体系的	体系的性質の程度は変化する

7. エスニック・リバイバル

なぜエスニシティが強化され問題となったのか? エスニックな現象は、基本的には産業化・近代化とともに消えてゆき、国民国家の統合は強化され文化の等質化が進むと考えられていたのに、現実には1960年代後半より先進諸国においてもエスニック・リバイバル現象が盛んになった。それ故に、以前は人種・民族・エスニック研究は大きな関心の対象とならなかったのであるが、

最近では、単なる民族承認だけではなく、分離独立を求める民族自決運動が周辺民族のみならず先住民族の間にも盛んになっている。なぜか。その理由を大きく3つにまとめてみると以下のようになる。

こだわりの理由

① 心理的理由

自らの文化・言語あるいは同一民族・エスニック集団に帰属するというのが、自らの安定的アイデンティティの源泉であるとともに、それらに対して原初的・本源的愛着を人は抱きやすい。また、社会心理学的には、人々は同質的なものに親近感を感じやすいという特質があるともいわれる。また社会生物学的には血縁中心の社会生活を長い間人々が送ってきたため、非血縁社会の行動パターンに慣れていないということもいわれる。

② 政治・経済的理由

**経済的理由** 文化・言語は生活手段である。自分が身に付けた文化・言語を自由に使用できないことは不利益を生じ、差別状態に置かれることになるが、これを文化的分業(国内植民地)状況という。こうした不平等状態から抜け出すためにエスニックな結束が求められエスニック運動が展開する。こうした動きは、社会の希少資源(教育、職業)をめぐる競合状態をうみエスニック紛争・対立が目立つようになる。

エスニック集団の利益集団化の発生といえよう。この場合、同化圧力のもと失われた文化・言語の再生あるいは、今まで意識しなかったエスニシティが不平等構造の中に押し込まれるようになり初めて意識されるということもあろう(道具としてのエスニシティ)。

**政治的理由** 国家主権と民族自決権に基づく国民国家システムの存在。

人は国民国家を支える民族の一員であると

きのみ独立・自由・平等を文字通り享受できる。その民族の一員ではなくマイノリティとして位置付けられる(マイノリティ国民)と、言語・文化が否定され不自由を強いられることになる。しかし、マイノリティであっても自分達が独自の文化をもつ集団であることが認定されれば、民族自決権を行使できる。そうでなくても民族承認の要求ができる。今日、民族自決権は、人権を実現する上で重要な権利となっている。自らも民族であることが要請されるのが現代世界である。全ての文化・言語の平等が人権概念の普及とともに当然視されはじめ文化権が確立し始めている。国民国家システムがある限り民族・エスニシティへのこだわりは消えない。それは、民族・エスニシティへのこだわりを前提としたシステムだからである(別言すれば、民族にこだわって初めて自由、平等となれるシステムなのである)。

## 8. エスニシティと多文化主義

心理的なこだわりの理由も状況的・道具主義的な立場からエスニシティを考える人々からみると、エスニシティやエスニック集団は、人間の心理的・情緒的欲求(社会的欲求)を満たすための結集の道具として見做されるかもしれない。いずれにせよ、以上の様々な理由から、人は個々の文化・言語にこだわるということであるならば、そうした違いを認めない社会は不安定になりやすい。故に、安定を保つためには、文化・言語の多様性を認めなくてはならなくなる。その結果、同化主義が否定され、多文化主義が要請されるようになる。多文化主義とは、長期的には国民国家の多文化・多民族化への動きは避けられないと認識するとともに積極的に多文化の存在を承認し、多様な利益を生み出そうとするとともに社会的安定を求める国民統合イデオロギーである。

こうした社会では、個々の成員が国民国家の成員であると同時に、独特な文化的存在である

エスニック集団の一員であることが求められるため、エスニシティおよびエスニック集団は肯定的に評価されることになり発展が求められる。しかしながら、マイノリティ集団であるエスニック集団の権利が重視され、アフターマティブ・アクション等が実施され、エスニック集団の一員であることが社会的に有利であり、逆に主流民族あるいは国民のほうが逆差別されているという被害者感覚がマジョリティ側に強くなると、マジョリティは自分達の文化・言語の指導的地位の確保のため、自らもマジョリティではあるがエスニック集団であると主張し、主流文化・言語の維持を主張するとともに、外国人、とくに非合法滞在者を中心に排斥的・新人種的差別的言動が高まり、多文化社会に緊張が高まっていくことが多い。こうして、エスニック集団がマイノリティを必ずしも意味しなくなる場合も生まれてくるが、これをそのまま素直に認めることは難しいであろう。

とはいえ、一度、民族・エスニシティの重要姓が認識され、多文化主義が導入されるとエスニック集団の活性化が起き、人々のなかには忘れていた伝統文化・言語を再生産する動きを起こすものも生じてくる。こうして多文化主義社会はエスニシティを再生産していくのである。

## <参考文献>

青柳まちこ編・監訳

1997 『「エスニック」とは何かーエスニシティ基本論文選』、新泉社。

カースルズS. /M. J. ミラー(関根政美・薫訳)

1996 『国際移民の時代』、名古屋大学出版会。

関根政美

1994 『エスニシティの政治社会学ー民族紛争の制度化のために』、名古屋大学出版会。

関根政美

1989 『マルチカルチュラル・オーストラリアー

多文化社会オーストラリアの文化・社会  
変動』、成文堂。

多文化社会研究会編訳

1997 『多文化主義』、木鐸社。

(せきね・まさみ 慶應義塾大学法学部)

◆ 人類学研究所 所長日誌 ◆

(1996.4月～1997.12月)

記録: クネヒト ペトロ

4/1(月) 近畿大学より、吉原和男氏を杉本良男氏の後任として迎える。杉本氏は国立民族学博物館へ転出。同日、南山大学文学部人類学科より、クネヒト・ペトロが当研究所へ移籍された。研究所発行の *Asian Folklore Studies* の編集作業を中心に、既に十年余り第二種研究員として所属していたが、今後は雑誌の編集の他に人類学研究所々長の任務も担当する。当日、新所長は海外出張のため学部の入学式に間に合わなかった。

4/2(火) 人類学研究所の新しい顔触れが揃った所で、第一回所員会議を開く。第一種所員 2名(クネヒト、吉原)と第二種所員 1名(坂井)が出席。新旧年度の予算報告の他に研究所主催の公開講演会の件を話し合う。夕方の六時から、大学近く中華料理店で人類学科の教員と共に歓迎会を開いた。その雰囲気、これからの協力関係はどういうものであるかの前兆なら楽しくなりそうである。将来は明るいだらう。先ず、研究所の創立五十周年記念行事のことが話題になった。

4/5(金)～6(土) 岐阜グランドホテルで南山大学新任教職員の研修会が行われる。吉原所員も参加する。

4/7(日) 吉原所員の案内で犬山祭りを見学し、桜がほぼ満開の日曜日を過ごした。野外博物館リトルワールドに少し立ち寄ってから帰途についた(坂井、クネヒト、ハイジック)。

4/8(月) 1996年度前期の授業開始。

4/10(水) 新学年第一回目的人类学科会議に吉原所員が新しいメンバーとして出席する。引き続き開かれる文学部教授会にも出席し、早川正一学科長によって紹介される。昨日、人類学研究所第一種研究員と所長の発令通知書を受け取ったクネヒト・ペトロは 4月1日付けで人類学研究所へ移籍したが、当分の間オブザーバーとして文学部教授会に出席することになった。午後5時より、教職員食堂で文学部新任教員歓迎パーティーが催された。新任は吉原所員一人だった。

4/18(木) 栄のイタリアン・レストランで、南山大学の宗教文化研究所と人類学研究所の合同懇親会を催した。イタリア料理とワインを味わいながら、新旧の第一種、第二種の研究員は親睦を深めた。

4/19(金) 北京で4月22日から4月28日まで開催される *International Society for Folk Narrative Research* のシンポジウムに出席するため、クネヒトが出発した。 *Asian Folklore Studies* の新しい協力者をスカウトするために、特に中国人の研究者との交流と意見交換を期待して。先ずは、中国社会科学院と中国民間文芸家協会の雑誌と AFS との交換が決定された。発表されたペーパーから三編を選んで、AFS のために論文にまとめて提出するよう著者たちに依頼した。民間文学界の長老たち、鍾敬文先生と賈芝先生にもお目にかかる機会があり、社会科学の若い研究者とも話し合いを持った。かつて、AFS は北京の甫仁大学で創刊された。この大学



は現在、北京師範大学の一部になっているが、鍾先生は北京師範大学の教員でもあり、AFS の前身 Folklore Studies もご存知の方なので、先生にお目にかかることは、この雑誌の二代目編集主任のクネヒトにとって一種の里帰りのような出来事だった。

5/11(土) 昨年一年間中止していた、人類学研究所主催の学生向けの公開講演会シリーズは、今回再開された。「日本人の女性人類学者」シリーズ、第一回の講師として千葉大学の荻原眞子教授を迎え、「北アジアの英雄叙事詩」というテーマで講演していただいた。シベリ諸民族の間に伝承されている英雄叙事詩の分布、文化的背景、語り方の時間、語り部の条件などについての約二時間の話だった。33名の聴衆が集まり、K21 教室はほぼ一杯になった。まずまずのスタートだったが、学生よりも名古屋地区の大学教員が多く出席した。講演後、荻原教授を囲んで生ビールで慰労会を行った。

5/25(土)～26(日) 吉原、クネヒト両所員が静岡大学で開かれた「日本民族学会 第30回研究大会」に参加した。第二種所員坂井信三助教授は「マルカ都市のイスラーム改革とその社会的背景」の論題で発表した(26日)。前日には、南山大学大学院後期課程の杉下かおるさんが「予言 prophesy 研究の問題意識」のテーマで発表した。クネヒトは土曜日の評議会に出席し、議事録の確認を依頼された。

6/15(土) 山下晋司 東京大学教授の呼びかけにより、クネヒトは「東京大学文化人類学研究室同窓会」に出席した。駒場の東京大学教養学部図書館で開かれたシンポジウム「文化人類学と現代世界」を始め、懇親会と二次会に参加した。

6/21(金) 名古屋地方の文化人類学の研究者(教員、大学院生)や社会人を対象に、人類学研究所の新たな催しとして、本年度の第二回懇話

会を開いた。University of California, Santa Cruz 校の Associate Professor Daniel Touro Linger を迎え、「The Identity Path of Eduardo Mori」のテーマで話題提供していただいた。豊田市を中心に出張ぎに来ているブラジル出身の日系人労働者の間で一年間のフィールドワークを終えようとする同準教授に、彼らの適応と文化や民族意識の在り方と問題について語っていただいた。出席者8名の小さな会だったが、懇親会に移って遅くまで Linger 教授との活気ある議論が続けられた。

6/29(土) 人類学研究所主催の公開講演シリーズ「日本人の女性人類学者」の第二回講演会を開き、東京外国語大学 AA 研の助教授三尾裕子氏を講師に迎えた。女性のフィールドワークの条件から始まり、台湾などの漢人の宗教について幅広く話していただいた。テーマは「漢民族文化と社会——移動と定住の視点から」であった。36名が出席したが、今回は学生の方が多かった。

10/3(木) 夏休みが終わり、後期授業が始まって間もなく、吉原所員は北京へ出発する。国際交流基金の派遣で、北京外国語大学内に設置された北京日本学研究中心で、修士課程の学生を対象に三ヶ月の予定で教鞭を執る。

10/12(土) 桜美林大学国際学部助教授 鷹木恵子氏を迎え、シリーズ「日本人の女性人類学者」第三回の講演を催した。「チュニジアのオアシス社会の比較考察：ジェリード地方とネフザーク地方」の題で話していただいた。話の後に、多くのスライドが映写され日本ではあまり目にするこのないオアシス社会を垣間見ることが出来た。定住農耕民の多いジェリードと遊牧民が主であるネフザークの様々な差異が興味深かった。参加者は少なく、12名であった。

10/18(金)～19(金) クネヒトは、佐賀医科大学で開催された第50回日本人類学会・日本民族

学会連合大会に出席した。今回の大会を最後に、連合大会を取りやめることが既に決まっているので、日本人類学、民族学の歴史的な出来事に参加したことになる。

11/30(土) クネヒトは、椋山女学園大学で行われた第 118 回中部人類学談話会において「最近の人類学の動向に思う」という題で発表した。佐賀学会の経験から出発して、特に民族学会名称変更の議論の中で浮上した、又は浮上して来ない幾つかの問題について私見を述べた。

12/7(土) シリーズ「日本人の女性人類学者」の第四回(最終回)。鈴鹿国際大学専任講師 青木恵理子氏が、「異化(alienation)という観点から見た‘大地’、‘女性’、‘言葉’:フローレス(東インドネシア)の事例から」の題でたっぷり理論的な話をしてくださった。学生たちにとって少し難しかったが、熱烈な議論が起こった。懇親会の席でも、講師は飲食するのを忘れて議論を続けていた。出席者は 20 名だった。

12/20(金) Kerala 州の首都 Trivandrum (Thiruvananthapuram) で開催された “17th Indian Folklore Congress ‘96’” に出席するため、クネヒトはインドへ出発した。会長の Dr. Jawaharlal Handoo (Mysore) の招きで出席し、開会日(12月23日)の午後 “Painted Narrative: The Pilgrims’ Way at the Sanctuaries of Ise” という題で発表した。大会の期間中多くの民俗学研究者と交流を持ち、特に Asian Folklore Studies に研究論文を提出してもらうよう努めた。大会後、Mumbai の Institute of Indian Culture を訪問して、研究所のメンバーたちと共に当研究所と南山大学人類学研究所の協力体制の可能性について相談した。将来、研究者の交流も含めて、協力関係を実現することを確認し、正月 2 日に帰名した。

12/31(火) 吉原所員は、北京での勤務を終え、帰名した。

1997 年

1/12(木) ドイツの Heidelberg 大学附属民族学研究所教授、Klaus Peter Köpping 氏を講師に迎え、人類学研究所の第三回懇話会を開いた。かつて真光の教祖、岡田光玉氏と会ってインタビューした経験がある Köpping 氏は、“Salvation in a Playful Mode: Religious Legitimation through Linguistic Means in the Case of Mahikari’s Founder” という題で、教団成立初期の様子とその意味について興味深い話をして下さった。言葉の遊びをしながら、教祖が如何に真理に迫ろうとしたかその方法について話して下さった。15 名が参加して熱心な議論があった。

1/14(火) 第五回人類学研究所所員会議開催。来年度中の本格的な研究計画の発足を目指して、吉原所員の主導で先ず準備的研究会を形成することを確認した。テーマは「アジア移民のエスニシティと宗教」である。更に、来年度の人類学研究所主催講演会を「ジェンダー」に関するシリーズにすることを決めた。

1/25(土) 第 119 回中部人類学談話会で、人類学研究所所属の研修生、Leila Madge は「商品ラベルの論争」という題で、進行中のフィールドワークの成果について発表した。

2/16(日)～3/1(土) 吉原所員は、カリフォルニアにて北米華人社会の短期調査と資料蒐集(文部省科学研究費による国際学術研究「アメリカ合衆国におけるアジア系移民集団に関する学術的研究」(代表: 小野澤正喜)による)。

3/10(日)～3/12(火) 筑波大学で開催された国際シンポジウム「国際化時代における移民民族集団の新展開」に吉原所員が出席し、“A Chinese Regional Association in Northern California: The Ethnicity of Chinese New Immigrants from Indochina” を研究発表した。

3/20(木)～4/1(火) クネヒトは、ハーバード大学の

Center for the Study of World Religions で開催される Shinto and Ecology Conference に discussant として招聘された。

4/4(金) 日本学術振興会の外国人特別研究員として先月来日した、Dr. Karen A. Smyers 女史(米国、ウェスレー大学)が人類学研究所の客員研究員として着任した。約 15 ヶ月間の予定で言霊を中心に言葉の呪力について調査研究を行なう。

4/16(水)～6/18(金) 吉原所員、朝日カルチャーセンター(名古屋市、栄教室)にて講師を務める。テーマは「香港返還：揺れる人と社会」(全 5 回)

5/7(水) Smyers 女史を囲んで、南山大学人類学科の数名の教員と共に、インド料理を味わいながら歓迎会を開いた。

5/31(土) 吉原所員、アジアエトス研究会において、「1997 年の香港社会」と題して研究発表。

5/10(土) 今年度の人類学研究所主催の公開講演会シリーズ「ジェンダーについて」の第一回講演会を開いた。中部大学国際関係学部助教授、宇田川妙子氏に「イタリア女性の強さはどこから来るのか：女性カテゴリー再考の試み」という題目で講演していただいた。講師のフィールド経験を基に、ジェンダーという概念の問題性について大変示唆的で、かつパーソナルな話について聴衆は熱心に耳を傾けた。それに続き、熱の入ったディスカッションもあり、中華料理店での懇親会の話題はアジアへ戻った。参加者は 25 名だった。

5/21(水)～22(木) 吹田市の国立民族学博物館で開かれた、日本民族学会 第 31 回研究大会に吉原・クネヒト両研究所員が出席した。約 3 年間にわたる討論が続いていた「学会名称変更」の問題は、名称を変更しない代わりに会則

を少し訂正するという形で解決した。

5/23(金) 吉原所員の担当で、人類学研究所の新しい長期研究プロジェクトが、「アジア移民のエスニシティと宗教」という題で発足。吉原所員の呼び掛けに応じて、13 名の非常勤研究員と吉原・クネヒト両研究所員が、研究所の一階会議室に集合した。クネヒトの挨拶に続いて、吉原所員は本プロジェクトの主旨とこれからの運営方針を説明した。続いて、各メンバーは自己紹介という形で、自分の研究分野と現在の関心について話した。最後に、これからの方針、研究会の日程と発表者の順番などについて概ねの協議と暫定的調整が行なわれた。やや堅い雰囲気だったが、引き続き開かれた懇親会の席でメンバーがお互いに親しくなる機会が設けられ、二次会まで持ち越して話し合ったりした人も何人かあり、順調なスタートだった。

5/26(月) 国立日本文化研究センターに留学中のベルギー人大学院生 Inge Daniels 氏は、しゃもじの伝統等について進行中の自分の研究を紹介し、Asian Folklore Studies に発表出来るか否かを問い合わせるために当研究所を訪れた。

5/31(土) 東海民俗学会で講演するために来名した、窪徳忠 東京大学名誉教授の 85 歳の御祝いが名古屋ガーデン・パレスで催された。クネヒトの恩師だということもあり、吉原所員とクネヒトが揃って出席した。

6/5(木) 吉原所員、同志社大学の第 15 回 外国文化週間クロストークにて講師を務める。講演テーマは「借りられた時間とその後、香港：現場からの視点」。

6/7(土) 成城大学民俗学研究所の主催で開かれた公開講演会にクネヒトが出席した。国立歴史民俗博物館教授、比嘉政夫氏が沖縄の「祖先・門中・おなり神」について講演された。「柳田文庫」は、将来公開できることを目指して、現

在整理作業が進んでいる旨の興味深い情報を得た。

6/14(土) 人類学研究所主催のシリーズ「ジェンダーについて」第2回の講演者として、東京大学大学院総合文化研究科助教授、瀬地山角氏を迎えた。「東アジアの家父長制」と題し、熟を入れて幅広く話して下さった。同じ「家父長制」といっても、それが中国・韓国・日本の各国では、どれ程異なっている制度であるかがよく理解できた。講演後の懇親会で学生たちが講師をすっかり独占し、ジェンダーのみならず、現在の若者の性などについて熱心な討論を続けた。

6/21(土) 名古屋の教育サービス・センターの招きで、クネヒトは研修中の高校教員を相手に、「国際社会における《文化》と《教育》—スイスと日本の場合」というテーマで講演した。

6/25(水)～7/5(土) 吉原所員は香港中文大学で開かれた、「国際アジア研究プログラム 20周年記念シンポジウム」に参加。香港の中国への主権返還をテーマにした、有意義なものであった。

6/28(土) ロータリー・クラブの米山奨学会のOG・OBと現役の奨学生とで組織された「米山奨学生学友会(愛知)」の発会式がメルパルク名古屋で開催された。この席上でクネヒトは第1回会長として選出され、直ちに就任した。

6/29(日) 東海地方の祭りを撮影し、活発な活動をしている写真家、本間久喜氏が最近発表した写真集『ふるさとの祭り歳時記』の出版記念会にクネヒトが出席した。

7/4(金)～17(木) ウィーン郊外の都市 Mödling の St.Gabriel 修道院(神言会)の研修所で開かれたワークショップ “Kirche auf dem Weltmarkt religiöser Angebote”(宗教供給の市場における教会)にクネヒトが招聘され、真光教団の例を中心に、「新宗教は普遍の教会に対す

る挑戦か」という題で研究発表した。

7/19(土)～20(日) 吉原所員、国内の研究者によって組織されるタイセミナーの研究合宿(愛知県蒲郡市)に参加。

7/26(土) 吉原所員、文部省科学研究費による国際学術調査「アメリカ大都市圏におけるアジア・太平洋系移民集団の民族間問題に関する比較研究」(代表:小野澤正喜)の研究会で研究発表。(東京大学教養学部にて)

7/29(土) 京都で勉学中の Clark Chilson 氏が研究所を訪れ、コピー・エディターの仕事内容について打ち合わせをした。現在、当研究所のコピー・エディターである、Thomas Kirchner氏が病気のため、年度末を目処に退職を希望しているので、Clark・Chilson氏がその後任になる予定である。

8/1(金) 南山大学のパツへ研究奨励金(特定研究助成) I-A を受けて、クネヒトは約2週間程、調査のため宮城県花山村に出掛けた。口寄せ儀礼の録音テープを起こすために、村人の協力を得ることと、裏付け調査を行なうことが目的であった。

8/17(日)～9/1(月) 吉原所員は「科研費による国際学術調査」の現地調査のため、アメリカ合衆国へ出張。ロサンゼルス・サンフランシスコ・ポートランド・シアトルの各都市にてインドシナ出身の中国系元難民の互助組織を研究。

8/21(木)～9/20(土) フランス Chantilly で9月1日から5日まで開かれた International Society for Shamanic Research の国際研究大会にクネヒトが出席し、口寄せの時に語られる「口」の内容について研究発表した。大会後、フランスからサンティアゴ・デ・コンポステラへ通ずる巡礼の道の出発点に当たる3都市などを見学し、中世の巡礼について調査と資料蒐集を行なった。

9/20(土) 吉原所員、国立民族学博物館の共同

研究会「アメリカ合衆国における多民族性の性格についての研究」(代表: 五十嵐武士) にて、「北アメリカ西海岸のインドシナ系中国人」と題して研究発表。

9/22(月)～27(土) 南山宗教文化研究所で行なわれた、神言会アジア・太平洋地区の宣教学者と人類学者のシンポジウムにおいて、クネヒトは日本の新宗教(真光教団を中心に) のコスモロジーについて発表した。シンポジウムは出席者の京都観光を最後に終了した。

10/18(土)～19(日)「アジア移民のエスニシティと宗教」の研究会が開かれ、慶應大学の法学部教授関根政美氏を特別講師に迎えて、「Ethnicity について」という題で話をしていただいた。研究会のメンバーは、18日に東京学芸大学教育学部助教授 藤井健志氏が「日系新宗教と移民: 研究史の再検討」という題で、また19日には野外民族博物館 リトルワールド学芸研究員 五十嵐真子氏が「台湾漢族の新宗教」という題で、それぞれ発表した。

10/25(土) 国立民族学博物館の杉本良男助教授が研究代表者となって発足させた、「福音と文明化の人類学的研究」の研究会にクネヒトが初出席した。

11/8(土) シリーズ「ジェンダーについて」の第三回公開講演会に、京都大学東南アジア研究センター助手 速水洋子氏を迎えた。「変わりゆく周縁少数民族におけるジェンダーの民族誌: 北タイ・カレンの場合」について話していただいた。

母系社会におけるフィールドワークの経験を中心に面白くてわかりやすい話であったが、大学での他の行事と重なったということもあってか、残念ながら出席者は少なかった。

11/9(日) 吉原所員、科研費調査による国際学術調査の研究会で Bernard Wong, *Ethnicity and Entrepreneurship*. の書評を小野澤氏と分担して行なった。

11/12(水) 大学の『五十年史』のためにビデオ録画するという広報室の企画でクネヒトは名古屋経済大学教授 斎藤達次郎氏と対談して、故沼澤喜市元学長に関する思い出を語り合った。

12/13(土) シリーズ「ジェンダーについて」の最終回講演に豊田短期大学助教授 成田弘成氏を講師として迎えた。「南太平洋のトランス・ジェンダー: サモアを中心に」と題して、ビデオ録画の貴重な資料を紹介し、サモアの第三性たちの世界について興味深い話をしていただいた。懇親会の席でも講師とのディスカッションが続き、人類学は कोरोバライセーションの進んでいる中で如何に求められる学問かが新たに認識された。大変素晴らしい集いだったが、出席者が極度に少ないことは残念だった。当日、吉原所員は東京外国語大学 AA 研の共同研究プロジェクト「東南アジアにおける人の移動と新しい文化の創造」(代表: 宮崎恒二) の研究会に出席するため出張した。

◆ 研究会 ◆

第6期研究計画(特定研究)

「アジア移民のエスニシティと宗教」

日時: 1997年5月23日

場所: 研究所1階会議室

報告: 今後の計画について協議

第1回研究会

## 第2回研究会

日時: 1997年10月18-19日

場所: 研究所1階会議室

報告:

第1日(18日)

- ・藤井健志氏「日系新宗教と移民」
- ・特別講師: 関根政美氏(慶應義塾大学教授)  
「Ethnicityについて」
- ・コメンテーター: 五十嵐真子氏

第2日(19日)

- ・五十嵐真子氏「台湾漢族の新宗教」
- ・コメンテーター: 藤井健志氏

## ・第3回研究会

日時: 1998年1月24-25日

場所: 研究所1階会議室

報告:

第1日(24日)

- ・川上郁夫氏「在日ベトナム人の宗教と生活世界」
- ・コメンテーター: 芹澤知広氏
- ・特別講師: 前山隆氏(阪南大学教授)「エスニシティを祀る—ブラジル日系人の場合—」

第2日(25日)

- ・王維氏「長崎華僑の祭祀と芸能—その類型と新たな伝統の創造—」
- ・コメンテーター: 吉原和男

## ◆ 講演会: シリーズ「ジェンダーについて」 ◆

## 第1回講演会

日時: 1997年5月10日

講師: 宇田川妙子氏(中部大学)

演題: 「イタリア女性の強さはどこから来るのか」

## 第2回講演会

日時: 1997年6月14日

講師: 瀬地山 角氏(東京大学)

演題: 「東アジアの家父長制」

## 第3回講演会

日時: 1997年11月8日

講師: 速水洋子氏(京都大学)

演題: 「変わりゆく周縁少数民族におけるジェンダーの民族誌」

## 第4回講演会

日時: 1997年12月13日

講師: 成田弘成氏(豊田短期大学)

演題: 「南太平洋のトランス・ジェンダー」

## ASIAN FOLKLORE STUDIES

## ◆ VOLUME LIV-(1995) ◆

## ARTICLES

- The Stone Baby (A.L.&F.Macfie)  
 Transfiguration (E.Lillehoj)  
 The Social Status of the Yakut Epic Hero  
 (V.V.Trepavlov)  
 The Carpenter-Preta (R.F.Young)  
 The Tale of Itu (S.Sen)  
 Traditional Content and Narrative Structure in  
 the Hindi Commercial Cinema (G.D.Booth)  
 The Last Tiger in East Java (R.Wessing)  
 Mountain Gods and Trance Mediums (K. Stuart  
 et al.)  
 Restoring the Epic of Hou Yi (M.Mori)  
 Yamato-takeru (C.S.Littleton)  
 The Woman Who Married a Horse (A.L.Miller)

## REVIEW ARTICLE

## ISSUES

## COMMUNICATIONS

## BOOK REVIEWS

## ◆ VOLUME LV-(1996) ◆

## ARTICLES

- Tagore's Lokashahitya (S.Sen)  
 The Festival of the Nine Emperor Gods in  
 Malaysia (H.T.Cheu)  
 Legends by the Numbers (L.Moses)  
 "Suan the Guesser" (R.Retherford)  
 Female Mountain Spirits in Korea (J.  
 H.Grayson)

The Folklore of Geckos (J.W.Frembgen)

The Looks of Laozi (L.Kohn)

Religious Belief in a Buddhist Merchant

Community, Nepal (T.T.Lewis)

The Thay (D.Bertrand)

"Stone Camels and Clear Springs" (J. Ma &  
 K.Stuart)

Type- and Motif-Indexes 1980-1995 (H.-  
 J.Uther)

## REVIEW ARTICLES

## OBITUARY

## COMMUNICATIONS

## BOOK REVIEWS

## ◆ VOLUME LVI-1(1997) ◆

## ARTICLES

A Turkish Animal Poem by Asik Omer  
 (A.L.&F.Macfie)

Professional Storytelling in Modern China (V.  
 Børdahl)

Text and Talk (L.T-h.Chan)

Geomancy and the Environment in Premodern  
 Taiwan (T. Tsu)

An Annotated Chhara Punthi (S. Sircar)

The Polythetic Network of Tamil Folk Tales  
 (G.E. Ferro-Luzzi)

On the Extinction of the Japanese Wolfv (J.  
 Knight)

## COMMUNICATIONS

## BOOK REVIEWS